
学園黙示録 二人の英霊と一人の転生者

アルビオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 二人の英霊と一人の転生者

【Nコード】

N4650N

【作者名】

アルビオン

【あらすじ】

この作品は『魔法少女リリカルなのは〜チート？何それおいしいの？〜』の本編で起きた土達の空白の二週間を書いたものです・・・というのは建前で唯単に他の作者の皆様が書いている学園黙示録の二次小説に感銘を受けて俺も書こう的な感じで始めることにしたというなんともふざけた理由がある駄作第3弾です。因みに私は原作知識はおろか漫画、アニメとも見てすらいけませんので他の作者の皆様作品を参考にさせてもらうこととなりますのでそこは大目にお願ひします。それと更新速度が亀の1000倍の遅さほどです。

ご了承ください

1話 公明(夏海)の罫(前書き)

さーて、始まりました。駄作者の暴走が。なんとか他の二つの作品の更新の邪魔にはならないようしますので宜しくお願いします

1話 公明（夏海）の罠

夏海

「お兄ちゃん、ちょっと来てー！！」
「どうした？」

俺は急に呼ばれて居間に行く。と、そこにはアーチャーとアサシン、それと怪しげな機械をもった夏海がいた

「夏海、それはなんだ？」

夏海

「ふっふっふ、良くぞ聞いてくれました！！これは私が作り上げた『デイメンジョンゲート』という機械で、なんと異世界に飛べちゃうのです！！」

「異世界にねえ〜で、これでどうすれと？」

夏海

「実際に異世界に行つて欲しいのです！！」

「いや、夜天の書の完成までもう余り時間が無いしいざ行つたとしてもかなりの期間帰つてこれないだろ？それにその間にマキナの奴に襲撃されたらどうするんだよ。」

夏海

「そこは大丈夫！！いくら異世界で時間が経とうとこつちの世界じや二週間しか経たないし、私が頑張つてマキナの手下でも侵入するのに一ヶ月はかかる強力な結界をこの海鳴全域に張つたから大丈夫！！」

「そうか・・・アーチャー、アサシン、どうする？」

アーチャー

「わたしは構わんぞ？」

アサシン

「私も構いはせぬ。」

「わかった。なら行ってみるとしよう。」

夏海

「ほんと！？やったー！！」

「そんなに嬉しいのかい……。で、行き先はどこなんだ？」

夏海

「それは行ってからの楽しみ」

「なんかいやな予感がするが……。まあいいか。」

こうして俺とアーチャー、アサシンは異世界に行く準備をする。と
いっても王の財宝に食料とか諸々を詰め込むだけだけ

「さて、準備も終わったことだしいくか。」

アーチャー

「そうだな。」

アサシン

「夏海殿、留守の間頼むぞ。」

夏海

「任せてね！！」

夏海はそういった後に機械のスイッチを入れた。と、同時に夏海の
後ろから本が落ちてきた

「ん？……。ま、まさか！！」

俺はこのとき後悔した。夏海の後ろから落ちてきたのは『学園黙示
録 high school of the dead』という日本
版のバイオハザードとも言われる漫画だった

夏海

「あ、見られちゃった・・・」

俺はそのとき確信した。俺達を送られるのは学園黙示録の世界だということ

「まじかあああああああ！！！！？？」

俺の悲痛な叫びも空しく、機械は発動してしまった

2話 終焉の始まり

ブオン

「いてて・・・まじで来ちまったみたいだな。」

アーチャー

「ああ、そのようだな。」

アサシン

「元いた世界となんら変りは無いな。」

「外見はな。さて、俺たちはどうすればいいのやら・・・」

俺がそういうとポケットの中に何かが転移してきた

「ん？なんだこれは・・・」

そこには『私立藤美学園高等部 流 士』と書いてあるものと『私立藤美学園高等部英語教諭 エミヤ シロウ』、『私立藤美学園高等部歴史教諭 佐々木 小次郎』と書いてあるものが入っていた

「まあご丁寧に・・・俺は転校生扱いか。」

アーチャー

「まあいい、何にせよまずはこの最高責任者に会わなければならないまい。」

「それもそうだな、んじゃいくか。」

そういつて俺たちは校舎に向かって歩き出した

担任

「さて、今日は急遽転校生と新人の副担任が二人来ます。さ、どうぞ。」

俺たちは今、自分のクラスに入った。ここが俺の新しい教室か、と思ったがすぐに奴らの巣窟と化すのか・・・と思いかいした

「今日から共に勉強する流 士だ。気軽に士と呼んでくれ。」

アーチャー

「今日からこのクラスの副担任になったエミヤ シロウだ。よろしくな。」

アサシン

「同じく今日から副担任となる佐々木 小次郎だ。よろしくたのむ。」

案外すんなりと自己紹介も終わった。アサシンの適応力には感服だ

先生

「それでは流君は・・・小室君の隣に座りなさい。」
「わかりました。」

先生に言われたとおりに席につく。すると隣に座っていた小室が話しかけてきた

小室

「よろしくな、士。」

「ああ、お前の名は？」

小室

「俺は小室 孝。唯のしがない高校生だ。」
「孝か、よろしくな。」

主人公との挨拶も済ませ、俺はアーチャーに念話をした

（アーチャー、ちょっといいか？）

アーチャー

（どうした？）

（干将・獬耶を投影して懐にしまっておけ。）

アーチャー

（なぜだ？）

（これは盛大なネタばらしになるんだが・・・恐らく今日中にパンデミックが起きる。）

アーチャー

（感染爆発？だがなぜ宝具を？）

（ウイルスに感染した奴らは恐らくゾンビ化する・・・そうなら迎撃する武器が必要だろ？）

アーチャー

（そういうことか・・・ではアサシンはどうするんだ？）

（あいつならもう背中に物干し竿担いでるぞ？）

アーチャー

（なに？）

アーチャーがそういつてアサシンの背中を見る。そこには鞘に納まった物干し竿があった

アーチャー

（あれでは不審に思われないか？）

（なんか知らんが一部を除いて全く気にしてないみたいだぞ？）

アーチャー

(そうか・・・で、その一部とは?)

(主人公一行。)

アーチャー

(なんとというご都合主義・・・)

(いづな。お、もう授業が始まるから切るぞ。)

俺はそういつて念話を終了した。俺のクラスの一時間目は歴史、担当教師は・・・

アサシン

「さて、改めて自己紹介するでしょう。今日からこのクラスの副担任と歴史の教師として赴任した佐々木 小次郎だ。よろしくたのむぞ。」

アサシンだった。というかなんであんなに違和感無く現代語を話せるんだ?いくら俺達と生活したとしてもこれは無理だろ

「なあ、小室・・・っていねえし・・・」

一時間目からサボりかい・・・まあ気にすることでもないか・・・

アサシン

「では教科書13ページを・・・」

その後、順調に授業が進んでいく。すると小室が焦った感じで教室に入ってきた

アサシン

「小室、トイレにでも行ってたのか?」

アサシンがちょっとふざけ気味にそう聞く。が、小室はそれを無視して一人の女子生徒の下に向かった

???

「ちょ、ちょっと何よ。」

小室

「逃げるぞ。」

「どうした小室？」

???

「何かあったのか？」

小室

「校門で殺人が起きた。早く逃げるぞ。」

???

「それ、本当なのか？」

小室

「こんな嘘ついて得なんてするか？」

「確かにそうだよな。それにそのことはどうやら本当だ。」

???

「転校生、何でわかる？」

「空気中に微量だが血の臭いがする。それも校門の方からだ。」

小室

「それより早く行くぞ。」

アサシン

「どうしたのだ小室？」

小室

「先生、校門で殺人が起きました。早く逃げないと。」

アサシン

「何？わかった。まず私が確認してくる。(土、拙者が先行して蹴

散らしてくる。後で合流しよう。)

(ああ、わかった。死ぬなよ?)

アサシン

(サーヴァントを甘く見てもらっては困る。
(ははっ、頼んだぞ。)

アサシンと小声で話し、先に先行させる

「小室、それとその二人、行くぞ。」

小室

「ああ、早くそうしよう。」

???

「わかった。麗、行くぞ。」

宮本

「ちよ、ちよつと永!!」

俺達4人は教室を出て、走り出した

宮本

「ちよつと孝!!何があつたのよ!!」

小室

「校門に不審者が現れた。それで体育教師の連中が見に行つて何かあつた。いま教師同士で殺し合いしてる。」

宮本

「そんな馬鹿なこと・・・」

ガチャ

小室

「どうした永、忘れ物か？」

井豪

「お前の話が本当だとしたら武器が要るだろ。」

永はそういつて掃除用具箱の中から箒を取り出して先を折り、槍のようにする

「まで、そんなものじゃ長く持たないぞ。」

井豪

「その場しのぎだ。これで十分だ。」

小室がバット、宮本が箒の柄、俺と永が素手となった

「井豪、お前はいいのか？」

井豪

「俺は空手の有段者だ。これくらい大丈夫だ。」

「いや、万が一もあるかも知れん。これを貸そう。」

俺は王の財宝から聖王オリヴィエが使っていた手甲を取り出して井豪に渡す

井豪

「！！いまそれ何処から出した？」

「企業秘密だ。これを使え。」

小室

「そんなのつけたら動きが遅くなるんじゃないか？」

「大丈夫だ。見た目に反する軽さだ。」

井豪

「確かにこれは軽いな。つけてもなんら問題は無い。」

小室

「ならいいが、お前はどこうするんだ？」

「俺はこれを使う。」

俺はポケットからスネークを取り出して左手につける

宮本

「これ？唯の手袋じゃない。」

「まあそれは後のお楽しみということ。それとお前ら親に連絡しなくていいのか？」

宮本

「したいけど今携帯ないし・・・」

小室

「あるぞ。」

「校則違反してて正解だったな。」

小室は宮本に携帯を渡し、宮本はその携帯で親に連絡をとる。が、そこで異変が起きた

宮本

「嘘・・・110番で一杯なんで・・・」

宮本がそういった直後、校内放送がかかった

先生

「全校生徒に連絡します！！校内で、暴力事件が発生中です！！生徒は、先生の指示に従って、非難してください！！繰り返します！！校内で、暴力事件が発生中です！！生徒は、先生の指示に従って、非難して・・・」

そこで不意に放送が途切れる

小室

「まさか・・・！！！」

先生

「ギャアアアアアアアアアアアアアアア!!！」

放送から先生の悲鳴・・・いや、断末魔が聞こえた。そして次の瞬間、校内のいたるところから悲鳴が聞こえた

井豪

「こつちだ!!！」

小室

「外に出るんじゃないのか？」

井豪

「教室棟は人で溢れかえってる!!管理棟から逃げるぞ!!！」

宮本

「永は正しいから、言うとおりにしてればいいの!!！」

小室

「わかってるよ、土!!！」

「ああ、そのほうが無難だな。」

こうして俺達は管理棟に向かった

宮本

「あれって、脇坂？」

管理棟に向かう途中、一人の教師に会う。が、その教師は既に・・・

小室

「気をつける、あいつ・・・!!」

奴らと化していた

奴ら

「ooooooooo・・・」

宮本

「いやっ、こないで!!」

井豪

「突け!!麗!!」

宮本

「え!?!」

井豪

「遠慮するな!!本気でやれ!!」

麗に本気でやるように促す井豪。ていうかマジでそうしないと死ぬぞ

奴ら

「ooooooooo・・・」

宮本

「槍術部を・・・舐めるなあああ!!」

完全にキレたのか手に持つ柄を振るい、教師を攻撃していく。そして止めといわんばかりに心臓に一突きした

小室

「やったあ!!」

小室が喜ぶ。が、まだ終わってはいなかった

「宮本！！前を見る！！」

宮本

「え？」

宮本が教師を見る。と、その教師は突然動き出した

宮本

「きゃあ！！」

壁に打ち付けられる宮本。生徒は宮本に噛み付こうと迫る

宮本

「そんなっ、心臓を刺したのに、何で動けるのよ！！」

宮本に迫る教師の腕。だがその腕は井豪の手により退けられた

井豪

「麗！！今のうちに引き抜け！！」

小室

「永！！離れろ！！」

井豪

「心配するなっ、こんな奴、俺なら！！」

そういつて教師を押さえ込もうとする井豪。だが、突然教師の首が後ろに回り始めた

井豪

「こいつなんで、こんなに力がっ！！」

教師が井豪の腕に噛み付こうとする。が、それは防がれた

「死ね！！パルマ・フィオキーナ！！」

俺の左手につけられているスネークから一条のビームが発射される。そしてそのビームは教師の頭を吹き飛ばした

「大丈夫か、井豪。」

井豪

「ああ、大丈夫だ。それよりも今のはなんだ？」

「光学兵器、とでも捉えといてくれ。」

井豪に軽く説明すると、管理棟から二人の男が出てきた

「アーチャー、アサシン！！」

アーチャー

「大丈夫か、士。」

アサシン

「その様子では問題ないようだな。」

宮本

「エミヤ先生に・・・佐々木先生？」

宮本がそういうのも仕方がない。今の二人の格好は今朝教室で見たスーツ姿ではなく、アーチャーが軽鎧に聖骸布、そして両手に二本の短い中華刀、アサシンが和服姿に一本の野太刀という姿をしているからである

アーチャー

「さて、屋上に逃げるぞ。」

井豪

「屋上には天文台がある。そこに立て籠もって救助を待とう。」

「その方がいいな、行くか。」

俺がそういった直後、下の方から悲鳴が聞こえた

生徒

「いやあああああ！！食べないでえええええ！！」

奴ら

「ooooooooo・・・」

生徒

「ぎゃああああああ・・・」

宮本

「酷い・・・なんでこんなことに・・・」

小室

「こんなの何人も相手にしてもらえない・・・」

俺たちは、足早に屋上を目指した

屋上につき、そこから街を見る

小室

「嘘だろ・・・」

そこには・・・いたるところで火の手が上がっている街があった

宮本

「そんな・・・今朝は何時もと同じだったのに!..!」

宮本がそういつた直後、突如として突風が吹き荒れる。そして何か
が飛んできた

井豪

「ブラックホーク!? アメリカ力軍、いや違う、自衛隊だ。何処から
来たんだ、近くに駐屯地なんてないのに……」

宮本

「助けてー!!」

宮本が助けを求める

井豪

「無駄だ。」

宮本

「え?」

井豪

「近くにいない自衛隊が、わけもなく飛んでくるもんか。きっと、
特別な任務を与えられてるんだ。俺たちを助けてる余裕なんてない。
あれを見ても放っているんだ。」

井豪が指す先には、奴らに襲われている生徒がいた

「走って逃げれる外でもこれなんだ、校舎の中は今頃……」

井豪の言うとおり、既に校舎の中は奴らの巣窟と化していた。証拠
に至る所から悲鳴とつめき声が聞こえた

井豪

「病気のようなものなんだ、奴らに……」

小室

「奴ら？」

井豪

「いくら死人が襲ってくるっていつても、映画やゲームじゃないかな。だから奴らさ。奴らは人を食う、そして食われた奴が死ぬと奴らとして蘇る。理由はわからないが、頭を潰す以外倒す方法は無い。」

井豪がそう言い終えた直後、何処からともなく奴らが出てきた

宮本

「じゃあどうするの？」

井豪

「あそこにあがって、階段を潰そう。」

井豪はそういって天文台を指す

アーチャー

「なら私たちが奴らを殲滅しよう。」

アサシン

「おぬしたちは先にあそこへ。」

「間違っても死ぬなよ。」

宮本

「ちよつと！あんた達何言ってるの！？死ぬわよ！？」

「何、この程度で死ぬほど弱くはないさ。さあ行け！！！」

俺はそういって三人を先に行かせた

「さて、殲滅と行くか。」

アーチャー

「出来るだけ早く片すとするか。」

アサシン

「さあ・・・行くぞ!!」

アサシンの声と共に戦闘を開始する

「断罪の剣!!」
エクスキューションソード

俺は右手に断罪の剣を作り出し、迫る奴らの首を次々と落としていく

「魔法の射手、連弾、光の300矢!!」
サキタ・マキセリウス
ルーキス

更に魔法の射手で小室たちに迫る奴らを吹き飛ばしていく。直撃したものは全て頭を吹き飛ばされ、その場に倒れていく

アーチャー

「ふっ、はあ!!」

アサシン

「せい!!」

一方アーチャーとアサシンも、干将・猊耶と物干し竿を使い、次々と奴らを殺していく。やはりサーヴァントとしての恩恵はこの世界でもあるようで、動きが早い

「アーチャー、アサシン!!下がれ!!」

俺は二人を下げ、広域殲滅魔法を使った

「深き闇に沈め・・・デアボリック・イミッション!!」

広域殲滅魔法により、屋上にいた全ての奴らが消滅した。この際に、少し屋上が削れたが気にしない気にしない

「さ、終わったぞ。」

宮本

「あ、あんた・・・何者？」

「俺は・・・唯の魔法使いだ。」

小室

「そんなことより大丈夫なのか？」

「何がだ？」

小室

「また連中が襲ってくるんじゃないか？」

「確かに・・・よし、階段にバリケードを造るか。」

俺はそういつて幾重にも剣を刺していき、巨大なバリケードを築いた

井豪

「さて、バリケードもできたしこれからについて話し合おう。」

その後、俺たちは今後について話し合った

2話 終焉の始まり（後書き）

士の現在の姿

肉体年齢 17歳

服装 制服

能力 全て使用可能

アサシンは周りに対する適応力が半端ないという設定で行きます

3話 学校脱出 上(前書き)

今回からmagune様の所天道アスム君がレギュラーとして登場します

3話 学校脱出 上

士 side

宮本

「で、あんたは本当に何者なの？」

「だから魔法使いだといっただろう。」

小室

「いや、いきなり言われても信じられないだろ。」

「あれを見てモか？」

井豪

「二人とも、それよりも今はこれからどうするかを決めよう。」

アーチャー

「そうだな。このままここにいてもいつ救援がくるかわからん。」

「そういえばアーチャー、お前一時間目授業だったろ？」

アーチャー

「ああ、それがどうした？」

「いや、お前が担当したクラスの連中はどうしたんだろって思っただけだ。」

アーチャー

「ああ、一応奴らが襲撃してきた時には助けてそのまま外に逃がしたがその後はわからんな。」

「外か・・・いや、何処だろうが恐らくは・・・奴らの餌食だな。」

井豪

「二人とも聞いてたか？」

井豪

「ん？これからについてか？」

「ん？これからについてか？」

井豪

「その様子だと聞いてないな・・・これから保健室に向かって鞠川先生を助け出した後、職員室に行つてマイクロバスの鍵を取つてき

てそのままマイクロバスで校外に脱出する。」

「鞠川先生か・・・確かに医学に精通している人がいれば安心だな。まあ既に奴らと化していなければだがな。」

井豪

「ああ。で、出発だが「今すぐだ。」今すぐ?」

「ああ、時間を置けば置くほど奴らと化している可能性が増えるかな。それにまだ生き残りもいるだろうから救出できる。」

井豪

「だが、武器も無い状態で行けば皆殺しだぞ。」

麗が使っていた柄は既に使い物にならなくなっており、孝のバットも中程から折れていた

「武器なら俺が貸す。宮本、槍は使えるな?」

宮本

「え、ええ。」

「ならこれを使え。」

そういつて俺は王の財宝から一本の槍を取り出す

宮本

「この槍?つてあんた今何処からだしたのよ。」

「何処から出したかは企業秘密だ。この槍の名は必滅のゲイ・ボウ黄薔薇、効果はこの槍で一度傷つけた物は所有者が死ぬかこの槍が破壊されるまで決して癒えない呪いがかかる。」

井豪

「ゲイ・ボウつて、あのゲイ・ボウか!??」

「知っていたのか。」

井豪

「何千年も前の英雄が使ってた槍だろ!!!まさか本物があるなんて・

・・・」

その言葉に宮本が戦慄する。流石に太古の英雄が使ってたとは知らなかったみたいだ

「気にするな。それと小室、お前にはこれだ。」

小室

「これは？」

「これは無毀なる湖光^{アロндаイト}。効果は自身の能力を1ランク高めてくれる。わかりやすくいうと身体能力が高くなるってことだ。」

井豪

「アロндаイト!？」

小室

「お、おい、どうしたんだ井豪？」

井豪

「どうしたもこうしたもそれはあのサー・ランスロットが使ってた聖剣だぞ!？今の日本で言ったら国宝級の代物だ!!」

小室

「まじでか!？」

「まじだ。因みに井豪、お前に貸したその手甲だって大昔、聖王と呼ばれていた人物が生涯使い続けた代物だぞ？時価にして推定10億円の超骨董品だ。」

そういうと井豪は驚き、何故か尊敬の眼で見してきた。なぜ・・・？

「いつまでもここに居るわけにもいかん。出発だ。」

俺はそういって、足早に保健室へと向かった。だって井豪の目が怖いんだもん・・・

屋上から飛び出し、保健室に向かう俺たち。目の前には奴らと化した生徒や教師がうようよいる

「悪いが死んでもらう！！ディバイン・・・バスター！！」

奴らに向けて漆黒の砲撃を撃ち込む。直撃したものは瞬く間に蒸発し、直撃していないものも衝撃波にやられ潰れていった。だが、全てを潰したわけではなく、何体もの奴らが襲い掛かってきた

アーチャー

プロトクン・ファンタズム

「壊れた幻想」

アサシン

「秘剣、燕返し！！」

残りの奴らをアーチャーとアサシンが潰す。これにより周辺の奴らが全て潰れた

宮本

「あ、あれ！！人が襲われてる！！」

「何！？」

宮本の声を聞き、その方向を見る。と、三人の生徒が襲われていた。良く見てみると、三人のうち二人は主人公一行の高城沙耶と平野コータであった。が、もう一人は全く知らない。そう思いながら見ていると、謎の一人が腕にありえないものをつけた

デュエルディスク
「なつ！？決闘盤！？」

この世界には遊戯王が存在しない。答えを出すもの《アンサー・トーカー》ではそう出た。だが目の前に存在しないはずのデュエルディスクが存在している。さらにそいつはデッキと思われるものからカードを一枚ドロし、デュエルディスクに置いた

???

「魔道戦士ブレイカーを召喚！！行け！！」

甲冑を着た一人の戦士が現れる。そしてそれは奴らを手に持つ剣で切り裂いた

「実体化だと！？」

モンスターの実体化はユベルと融合した十代しかできないもの。それを行ったということは・・・

「転生者か。小室、助太刀に行ってくるからここで待機している。」
小室

「なに言ってるんだ！！全員で行ったほうが大丈夫だ。それにここは狭い、大人数で行っても逃げ道を潰すだけだ。」う・・・わかった、絶対に死ぬなよ！！」

「ああ、絶対にだ。」

そういつて俺は三人の元に向かった

???

「くそつ！！数が多い！！」

高城

「あんだ、このままじゃ全滅よ!!」

平野

「でも逃げられませんよ!!」

三人がそういつてる中、俺は断罪の剣を発動させて三人の目の前に降り立った

「お前ら、大丈夫か!!」

高城

「ええ、大丈夫よ!!」

平野

「やった!!助けが来た!!」

二人は喜んでいたが一人、転生者と思われるものは驚いていた

???

「なっ!?!断罪の剣!?!」

「これを知ってるということはやはり転生者か。名は?」
???

「俺は天道アスムだ。お前も転生者か?」

「ああ、名前は流士。ここは引き受ける、お前達はあそこの奴らと合流していてくれ。」

俺はそういつて小室たちを指す

天道

「でもお前が「死なないさ。これまでも幾多の死線を乗り越えてきたんだ。」なら俺も戦う!!」

「いや、お前はこの二人の護衛を頼む。あいつらの元までな。」

天道

「・・・わかった。だが死ぬな!!」
「ああ、絶対に死なないさ。」

俺の言葉を聞いた天道は二人を連れて小室たちのほうへ向かった

「さて・・・ここからは絶望タイムだ。メタモルフォーゼ・・・ソードインパルス!!」

俺の身体が光り、ソードインパルスへと変化する。それを離れていた所から見ていた小室たちはありえないものを見たような目で見えてきた

「さあ、行くぜ!!」

俺は背中の対艦刀『エクスカリバー』を両手に一本ずつ持ち、奴らに斬りかかった

士 s i d e e n d

小室 s i d e

俺は今ありえないものを見ている

小室

「人が・・・ロボットになっただと!?!」

士が何かを言ったかと思うと突然光出し、光が晴れた時には既にロボットになっていた

宮本

「何なの・・・あいつ、人間なの!？」

井豪

「どうやったら有機物が無機物にかわるんだ・・・」

二人も驚いてる。だがエミヤ先生と佐々木先生だけは当たり前のようにな目で見ている

高城

「嘘・・・あんなのあり得ない!!」

平野

「非常識の塊だ・・・!!」

天道

「ソードインパルス!? あいつ、どんだけ能力持ってた!?」

天道は何かを知ってそうだが、今は聞くわけにもいかない

小室

「沙耶、コート!! 大丈夫か!？」

高城

「孝!! そつちこそ大丈夫なの!？」

小室

「ああ!! こつちは大丈夫だ!!」

平野

「あの人転校生だよね!? 一体何者なの!？」

小室

「あいつは自分のことを魔法使いって言ってたぞ。」

高城

「魔法使いなんでいるわけじゃない!!」

小室

「でもあいつ俺たちの前で魔法を使ったんだ。だよな、麗、永。」

宮本

「ええ、確かに魔法の射手って言った直後に光の矢がいくつも飛んできたわ。」

井豪

「それにデアポリック・イミッションだったか？そんなことを言った直後に黒い球状の何かが奴らを消したな。」

麗と永が二人に説明していると奥のほうから物音が聞こえた

小室

「まずい・・・奴らだ。」

平野

「え！？どうするの！？武器なんて・・・」

宮本、井豪、小室

「「「あるぞ（わよ）」」」

俺たちはそれぞれ土から貰った武器を出す

井豪

「さて、さっさと」まあ待て、ここは私が行こう。「エミヤ先生！？」

宮本

「そんな！？先生その双剣しか持ってないじゃない！！」

その通りだ。エミヤ先生はさっきから使ってる双剣しかない。それに奴らの数はかなりいる。そんな状態でかかれば嘸まれて奴らになるのがオチだ

アーチャー

「何、ここから攻撃すればいいだろう。」

先生はそういつて何かを唱えた

アーチャー

「I am the bone of my sword 《我が骨子は擦れ狂う》・・・」

先生の手に弓と矢が現れた。そして先生はそれを奴らに向けて

アーチャー

カラドボルグ
「偽・螺旋剣」

射た。その矢は奴らにとてつもない速さで直撃し

アーチャー

フロクン・ファンタズム
「壊れた幻想」

爆発した。俺は驚いた。先生が何処から弓を出したかなんてどうでもいい。どうやって爆発させたかが知りたかった。だけどそれは叶わなかった。なぜなら・・・

「アーチャー、お前宝具使ったな？」

最も謎に包まれた人物が戻ってきたから

小室side end

士side

俺は手に持つエクスカリバーで奴らを切り裂いた。頭を潰し、胴体

を切り裂き近づくものには頭部のバルカン砲を浴びせ、離れた連中には背中のフラッシュエッジを投げつけて殺した

「数が多いな・・・一気に殲滅する！！メタモルフォーゼ、ZZガンダム！！」

俺は再度身体を変化させ、ZZガンダムへとなった。そして頭部にある巨大な砲門にエネルギーを溜め・・・

「ハイメガ・・・キャノーーン！！」

一気に開放した。解放したエネルギーは2メートル程のピンク色の太い線となって奴らに襲い掛かった。直撃したものから消滅し、すぐ近くにいたものも発生したプラズマに身を焼かれ消えていった

「ふう・・・これで片付いたな。」

通路にいた奴らは全て消滅し、幾ばくかの安息が手に入った。と、その瞬間小室たちがいるほうから爆発音がした

「っ！！いまのは!?!」

急いで小室たちのほうを見る。が、小室たちは無傷、なんら変わりはない。ただ、アーチャーが黒塗りの弓を持っている以外は

「弓・・・てことはあいつ・・・はあ。」

俺は思わずため息が出た。今の爆発はアーチャーによるものだとわかったからだろう

「まったく・・・まあいいか。」

俺は元の姿に戻り、小室たちの下に向かいこういった

「アーチャー、お前宝具使ったな？」

士 side end

三人称 side

士がアーチャーに向かってそういった後、アーチャーはさも当然のように言った

アーチャー

「ああ、使ったがそれがどうした？」

「あのな、お前の宝具の使い方は馬鹿でかい音が出るだろ。それで奴らを引き寄せてるようなもんだぞ？」

アーチャー

「ならそのたびに殲滅すればいいだろう？」

「はあ・・・まあいいか。」

小室

「なあ士、さっきのはなんだ？」

「あ？MSになった奴か？あれは俺の特殊能力とでも捉えといてくれ。」

宮本

「詳しく教えてくれないの？」

「これについては詳しくは無理だな。」

高城

「ねえあんた、本当に魔法使いなの？」

「いかにも。」

高城

「なら証拠見せなさい。」

「上からかい・・・まあいいや。バインド。」

士は証拠と言わんばかりに高城にバインドをかける

高城

「っ！？なんなのこれ!？」

「これはバインドという束縛魔法だ。まあ初歩に入る魔法だな。」

士はそれを言い終わるとバインドを解除した

「さて、これで信じてもらえたか？」

高城

「ええ、あんなのを見せられて信じれないほうがおかしいわよ。」

「それは結構。で、お前達武器はあるのか？」

天道

「俺はこれだ。」

天道はそういつてデュエルディスクを出してくる

「ふむ・・・能力だけに頼る形になってるな。これでは集団戦闘に向いてない。なので俺から武器をわたす。」

士はそういつて王の財宝からGNソードを取り出した

天道

「王の財宝!？何でもありだなオイ・・・」

「知ってたか、まあいい。お前はこれを右手につけて戦え。」

天道

「だがこんなにでかかったら屋内で使えないぞ？」

「そのときはGNライフルとして使えばいいだろ。」

天道

「まあそうだよな・・・」

天道はそういって右手にGNソードを持った

「次だ。平野、お前は？」

平野

「僕はこれを。」

平野は自作の釘撃ち銃を見せる

「これが・・・銃の扱いはいけるか？」

平野

「アメリカで銃器の訓練を一ヶ月受けたから大丈夫だよ。」

「そうか、ならお前はこれだ。」

士はそういって再度王の財宝を開き、一丁の銃を取り出した

平野

「ねえ、いまのどうやったの？」

「企業秘密。銃の名前はパトリオット、弾数無限、威力はライフル並、反動はハンドガン程度という真正正銘のバケモノマシンピストルだ。」

平野

「これを僕に？」

「ああ、存分に使ってやれ。」

平野

「ありがとう!!!」

「そいつはどうも。次は高城だが・・・武器は？」

高城

「持ってないわ。」

「丸腰か・・・ならこいつだな。」

高城

「これは？」

「ハンドキャノン。反動は少しでかいから両手で持って使うこと。威力は一撃でコンクリートを粉碎できる。因みに弾数無限。」

高城

「はあ・・・あんたってとことん規格外ね。」

「よく言われる。で、武器は一通り回ったしこれからどう動く？」

井豪

「当初の目的の通り保健室に行つて鞠川先生を救出。「生きてたらな。「その後のことは保健室で決めよう。」

「了解。んじゃ、行くか。」

宮本

「ちよつと待って。」

「ん？どうした？」

宮本

「あんたいつまでも苗字で呼ばないでちゃんと名前で呼びなさいよ。」

麗

「ああ、そういうことね。んじゃあこれでいいか？麗。」

麗

「ええ、それでいいわ。」

「それじゃ、改めて行きますか。」

士達は新たな仲間を加え、保健室に向かった

3話 学校脱出 上(後書き)

前回校門のイベントをほったらかしにしたのは原作と同じ進み方にするためです。武器のハンドキャノンはバイオハザード4、パトリオットはメタルギアソリッド3から持ってきました

4話 学校脱出 中

俺達は今、保健室前にいる。ここまでするのに数多もの奴らを殺してきたせいで全身血まみれである

ガラッ

「鞠川先生、大丈夫ですか!？」

保健室の戸を開けるとそこには、頭を潰された生徒と座り込む鞠川先生、そして木刀を持って立っている一人の女生徒がいた

???

「っ!?!?生存者か?」

「ああ、お前は?」

???

「私は毒島冴子。呼ぶ時は冴子と呼んでくれ。」

「ああ、わかった。俺は流 士だ。で、鞠川先生は?」

冴子

「奴らに噛まれてはいない。大丈夫だ。」

「そうか、良かった。」

俺がそういうと後ろから孝たちが入ってきた

孝

「士、大丈夫か?」

「ああ、生存者は二人、鞠川先生と冴子だけだ。」

アーチャー

「士、ここから離れるぞ。」

「どうした、アーチャー？」

アーチャー

「窓の外を見る。」

アーチャーに言われて外を見ると、そこには奴らの群れ……とても言うべきものが此方に向かってきていた

アスム

「やばいぞ、あれだけの大群を相手になんて……」

「出来る。というか一撃で殲滅してやる。バベルガ・グラビドン！」

俺はディオガ級の重力呪文を使い、奴らを圧殺し、殲滅した

沙耶

「……あんたバグね。」

「俺はナギヤラカンじゃねえよ。」

麗

「なに言ってるの？」

「独り言だ。気にするな。」

永

「それよりもはやく職員室に行くぞ。」

コータ

「え？でも、職員室には奴らが……」

スネーク

《問題ない。動体センサーに反応はない。》

突然の声に、驚く孝たち

「スネーク、勝手に喋るなよ。皆驚くだろ。」

スネーク

《いつまでも黙っているとストレスが溜まって仕方ないんだ。サーヴァントもそうだろ?》

サーヴァント

《確かにただ黙っているのはストレスが溜まりますね。》

アーチャー

「む、セイバー。私は黙らせた覚えなどないぞ?」

俺とアーチャー、二人の男が手袋とブレスレットに話しかけている様は、かなりシュールな絵であろう。まあそんなことは気にしてられないが

麗

「今の声って・・・その手袋から?」

「そういうこと。スネーク、自己紹介しとけ。」

スネーク

《俺は士のデバイス、スネークだ。宜しく頼むぞ。》

サーヴァント

《私はアーチャーのデバイス、サーヴァントです。現在の人格はセイバーですので呼ぶ時はセイバーをお願いします。》

孝たちに自己紹介するスネークとサーヴァント。だが肝心の孝たちはついていけない様子だ

「お前ら、呆けてないでさっさと移動するぞ。」

俺はそういい、保健室から出る。それを追いかけるように孝たちも出てきた

「なあ冴子、お前野太刀は使えるか？」

俺は走りながら冴子に聞いた。木刀だけではいつ折れるかわからないからな

冴子

「野太刀？使えるには使えるが・・・」

「ならこれを使え。」

俺は王の財宝から一本の野太刀を取り出した

冴子

「いまのは？」

「何度も言うが企業秘密だ。この野太刀の名は夕凧、対化け物用に打たれた業物だ。」

冴子

「ほう・・・業物というだけあってかなりのものだな。」

「気に入ってくれたのなら結構。」

そういった直後、前のほうから奴らが数体出てきた

永

「またか。いい加減うざいな！！」

「全く持つてその通りだ。雷の暴風！！」

雷を纏った暴風により、奴らは吹き飛ばされ、そのまま壁に頭を強打して動かなくなった

アーチャー

「孝、職員室はまだか？」

孝

「職員室ならもう少しですよ!!」

次々出てくる奴らを自分の得物で殺していく。そして俺達は職員室についた

「全員入ったか？」

永

「ああ、これで全員だ。」

「よし、ならバリケードを張るぞ。」

俺は職員室の扉の所に投影した数多の剣を刺し、簡易バリケードを作り上げた

「よし、これで大丈夫だ。鞠川先生、車の鍵はありますか？」

孝

「車の鍵？何に使うんだ？」

「ここからの脱出手段。」

鞠川先生

「えーと、かばんの中に私の車の鍵が・・・」

冴子

「その車は全員を乗せて逃げれる車ですか？」

鞠川先生

「うっ・・・」

どうやら鞠川先生の車は軽乗用車だったようだ

冴子

「部活の遠征用のマイクロバスがあります。鍵は壁にかかっているはずですから……」

「これか？」

冴子

「そう、それだ。」

冴子がそういった時、麗がテレビをつけた

麗

「……!!!!うそ……」

そこには、奴らに向かって拳銃を撃つ警官の姿が映っていた。報道では各地で暴動発生と言っているがこれまでの状況から直ぐに嘘だとわかる

孝

「なんだよ……!!!暴動って!!!」

沙耶

「パニックに陥らせないためね。」

孝

「今さらだろ!!!」

沙耶

「今さらだからよ!!!ただでさえパニックになってるのにこれ以上パニックになったら何もできなくなるわ。」

沙耶がそういった直後に、麗が弱弱しく言った

麗

「ねえ……大丈夫よね……絶対に安全な場所、あるよね?明日

になればまた何時もみたいに。」

沙耶

「なるわけないしー。」

孝

「沙耶！！そんな言い方ないだろ！！」

沙耶

「仕方ないでしょ！！パンデミックよ！？」

「パンデミックよりもバイオハザードの方が合ってるな。感染死した奴がよみがえるウイルスなんて自然界で生まれるわけがない。」

沙耶

「確かにそうね。どこかで人為的に造られたとしか思えないわ。」

孝

「じゃあ、どうしたらこれは終わるんだよ。」

永

「奴らは一応死体だ。何日かすれば肉が腐って骨だけになって動けなくなる。静香先生、大体何日くらいで腐食が始まります？」

鞠川先生

「えーと・・・夏場は大体20日くらいで一部が白骨化して、冬場は何ヶ月もかかるけど・・・一ヶ月くらい待てば動けなくなるわ。」

鞠川先生の言葉に麗たちが明るくなるが、現実には甘くない

「いや、そうともいかない。」

永

「え？」

「死体が動くって時点で既に医学の領域じゃない。それにウイルスがどんな物かもわかったもんじゃない、もしかしたら腐食を抑制する効力があるかもしれない。」

アーチャー

「ふむ、確かに士の言うとおりだな。」

孝

「じゃあどうするんだよ。」

「奴らを狩り続けるか、奴らを捕らえて専門の機関に送ってワケチンか特効薬を造ってもらうほかないな。最終手段は・・・この地球を破壊して月にでも移住だな。」

沙耶

「他に方法はないの？」

「無いな。俺の親友にこういったものを全て瞬く間に治せる奴もいるけどそいつは今遠くに言ってるからな・・・」

永

「今そんなこといっても仕方が無い。まずはこれからどうするかだ。」

「

話の話題を変える永。 ナイスだ

「まずは家族の安否を確認したほうがいいんじゃないか？」

アサシン

「だが士、どうやるのだ？」

「マイクロバスでここから近い順に回っていく。助けられる人は助けながらな。」

永

「それがいいな。で、出発は？」

「30分後。それまでに体力を回復しておけよ。」

俺がそういい、各々に休憩させた

30分後・・・

「全員体力は回復したな・・・よし、行くぞ!!!」

孝、麗、永、沙耶、コータ、冴子、鞠川先生、アスム、アーチャー、

アサシン

「oooooooooooooooooooo(はい)!!!」

俺はバリケードにしていた無数の剣を消し、職員室から出た

「殺る必要の無いのは無視しろ!!!」

そういった直後、前方から進路上に奴らが5体出てきた

アスム

「うらあ!!!」

アーチャー

「はっ!!!」

コータ

「当たれッ!!!」

「よし、先に進むぞ!!!」

次々現れてくる奴らを殺しながら進んでいく。そして外付けの階段に到着した。と、そこで生存者の5人を見つけた

「生存者だ!!!助けるぞ!!!」

生存者の前には奴らが6体、既に迫ってきていた

アサシン

「秘剣、燕返し!!!」

「ザング・マレイス!!!」

俺とアサシンの攻撃により、奴らが切り刻まれた

「大丈夫か!!」

生徒A

「は、はい!!」

アサシン

「噛まれたものはおらんか？」

生徒B

「いませんいません!!」

首を横に振ってそういう。みた所本当の様なので安心した

「ここからマイクロバスに乗って逃げるぞ。お前達もついて来い。」

生徒A

「わ、わかりました。」

「それとそこの。首にかけてるタオルは取っておけ。使われたりしたら終わりだぞ。」

生徒C

「は、はい。」

「それにお前、さすまたは置いてけ。」

生徒D

「え?でも武器が・・・」

「長物に慣れていない奴が使っても振り回されるだけだ。それにどこかにぶつけて音でも出したら奴らが寄ってくるぞ?」

生徒D

「わ、わかりました・・・」

そっいつてさすまたを静かに置いた。これで幾らか死亡フラグを折れたな

「さあ、いくぞ。」

俺達は再度マイクロバスに向かった

「奴らで溢れかえっているな・・・」

沙耶

「どうするのよ、音も立てずに殺せる？」

冴子

「私がやるう。」

冴子がそういつて何かを振るう。すると、そこにいた奴らの首が全て切れた

「ワイヤーか。」

冴子

「ああ、職員室に在った工具箱から拝借してきた。」

「何はともあれ道は開けた。先に進むぞ。」

俺達は静かにそこから先に進んだ。が、ここで予期せぬことが起きた

ガゴオオオオ！！

「な！？走れ！！」

急にロッカーが倒れたのである。そしてその際に出た音は・・・学校の敷地内に響き渡った

沙耶

「どうして大きな声なんか出したのよ!?!」

「あれだけ大きな音が出たんだ、怒鳴ろうが変わらん!?!」

コータ

「やばい、奴らが来た!?!」

「何!?!全員、躊躇なく躊躇い無く殺せ!?!でないと生き残れないぞ!?!」

孝

「はあっ!?!」

麗

「やあっ!?!」

永

「せいっ!?!」

アーチャー

トレス

オン

「投影、開始。工程完了。全投影、待機。停止解凍、全投影連続層

ブシ写・・・!?!」

アサシン

「そりゃ!?!」

「居合い拳!?!」

コータ

「うおおおお!?!」

沙耶

「当たれッ!?!」

冴子

「はあ!?!」

アスム

「おらあ!?!」

それぞれが奴らを自身の得物で殺していく。先程助けた生徒達も自分の周りの奴らを殺している

「バスが見えた！！先生、鍵を！！」

鞠川先生

「あ、はい！！」

鞠川先生から鍵を受け取り、音速を超える速さで飛ぶ。途中発生したソニックムーヴで奴らを切り刻みながら

ガチャ

「よし、開いた！！」

俺はそういつて運転席に座り、エンジンをかけた。と、ちょうど孝たちがバスに到着したようだ

「大丈夫だな！？」

孝

「ああ！！誰も噛まれてない！！」

「わかった、全員乗り込んだか！？出発するぞ！！」

俺がそういつた直後、外から声が聞こえた

????

「待ってくれ！！助けてくれー！！」

声のするほうを見ると、一人の教師と数人の生徒が走っていた

「生存者か！！」

麗

「し、紫藤・・・」

「助けにいつてくる、鞠川先生は運転を！！」

鞠川先生

「わ、わかったわ!!」

麗

「まって!!紫藤なんか助けなくていい!!あんな奴死んだほうが!!」

「だが他の生徒もいる、そいつらを見殺しにするわけにはいかん!!」

俺がそういつて外に出た時、紫藤が足をくじいた生徒を囿にして逃げてきた

「あいつ、なんてことしやがる・・・!!お前ら!!早く!!」

生徒E

「やった!!助かった!!」

生徒はそういつて喜ぶが、既に奴らは直ぐ後ろまで迫っていた

「ちっ!!全員耳塞げ!!千の雷、キリブル・アスヤラヌーティウエソナルギーリス雷の投擲、結合!!」

二つの呪文を結合させる。そして、俺の頭の上に全長15メートルほどの巨大な雷の槍が現れる

「雷神槍、巨神殺し《ティタノクトノン》!!おらあ!!」

その槍は、奴らのちょうど真ん中に直撃、数十体の奴らを巻き込みながら地面に刺さった

「仕上げだ!!開放、エミッテンディオス・ロンケーイキーリブレイブロアオカオ五ペーン雷神槍!!千雷、招来!!!!」

その言葉が発せられた瞬間、巨神殺しから半径約100メートル内

に無数の雷が落ちた。そしてそれは奴らを焼き、例外なく灰にしていった

「これで片付いたな。」

そういつて俺はバスへと戻って行った

5話 学校脱出 下

「鞠川先生、運転大丈夫ですか!？」

俺は奴らを殲滅した後、皆が乗っているバスに戻り、鞠川先生に運転を頼んでいる。のだが、明らかに軽自動車と違うこのマイクロバスに悪戦苦闘のようで、何度も木にぶつかりそうになったりして非常に危険だ

鞠川先生

「そんなこといわれても私の車と違うから運転しづらいのよ!!」「ならどけてください!!！」

そういつて俺は鞠川先生を後ろに避け、そのまま運転席に座った

「全員、衝撃に備えろ!!突っ切るぞ!!！」

そういつて俺はアクセルを全開にし、奴らを轢きながら正門に向かって走り出した。そして正門を破壊して学校の敷地内からの脱出を成功させた

「ふう、鞠川先生、運転交代お願いします。」

鞠川先生

「え、ええ・・・わかったわ。」

麗

「あんだ、運転できたの?」

「基本なんでも。戦艦だろつと動かせるぞ。」

沙耶

「規格外にも程があるでしょ・・・。」

「まあまあ、そういうなよ。」

俺がそういうと、一人の生徒が怒鳴りだした

生徒A

「大体よお、なんで俺らまで小室たちに付き合わなきゃいけないんだ！？お前らが勝手に街に戻るって決めただけじゃんか！！」

言いたい放題言う生徒。だが、実際は唯の我俣だ

生徒A

「寮とか学校の中で安全な場所を探せばよかつたんじゃねえか！？」

生徒B

「そうだよ・・・このまま危ないだけだよ・・・どこかで立て籠もったほうが、さっきのコンビニとか・・・」

他の生徒が便乗して言うてくる

生徒A

「今からだって遅くない！！大体俺は・・・」

そついかけた瞬間、俺はそいつの喉元に投影したデュランダルを突きつけた

「うるせーぞ。大体乗り込んできたのはてめえだろ。それともなんだ？今すぐバスから放り出して欲しいのか？」

俺がそういうと、その生徒は黙って座り込んだ。そして、急に紫藤が喋りだした

紫藤

「いや、見事ですな。流君。」

そういう紫藤。はっきり言ってウザい、今すぐ殺したい

紫藤

「しかし……こうして争いごとが起こることは私の意見の証明にもなっています。」

いい加減黙って欲しい。空気が汚れる

紫藤

「だから、リーダーが必要なんですよ、我々には。」

だからどうした？自分がその資格があるとしても言いたいのか？

沙耶

「で？候補者は一人つきりってワケ？」

その通り、アーチャーもアサシンもその気ではない

紫藤

「私は教師ですよ？高城さん。そして皆さんは学生と今日来たばかりの新米教師、それだけでも資格の有無ははっきりしています。」

もうヤダ。今すぐあいつを細切れにしたい

紫藤

「どうですか？みなさん、私なら……問題が起きないように手が打てますよ？」

貴様の存在が問題だコノヤロー。俺が心の中でそう思うと、回りのモブキャラたちが拍手をし始めた

紫藤

「と、言うわけで・・・多数決で私がリーダーということになりました。」

何が多数決だ。唯他の生徒を誘導しただけじゃないか

紫藤

「今後は・・・」

紫藤がそついいかけると、麗がバスの助手席のドアを蹴破って外に出た

麗

「嫌よ！！そんな奴となんか一緒にいたくない！！」

紫藤

「行動を共に出来ないというのであれば、仕方ないですね・・・」

紫藤がそんなことを言い出した。それを聞いた俺たちは、全員そろってバスから降りた

紫藤

「仕方ないですね・・・ですが、流君と鞠川先生はご遠慮願おう！

！」

麗

「どござしてよー！！」

紫藤

「ここで医学に精通している人を失うのは余りに痛い！！それに、流君のあの力！！あれがあれば生存率は一気に上がります！！」

何たる自己中心的な意見。キモいったらありやしない

紫藤

「さあ、二人ともバスの中に戻ってくだ。黙れ、貴様に指図なんてされるか。死ぬならどっかでのたれ死ね。」・・・」

紫藤が黙る。どうせここまでいわれるとは考えてなかったのだろう

紫藤

「そうですか・・・なら、武器だけでも置いてってもらいましょうか。」

「武器？欲しいならやるよ。ほら。」

俺はそういつて投影したいくつもの剣をバスの中に放り込んでいく。その数、約40。中には名の知れた名剣、魔剣や、宝具までが入っている

「さっさと消えろ。目障りだ。」

俺はそういつてバスの戸を閉めて、歩き出した

麗

「ちょっと土！！なんで武器なんて渡したの！？」

「なに、ちょっとした面白いことをしようと思っただけ。」

孝

「面白いこと？」

「ああ、見てろよ。」

俺はそういつて一言だけ言った

「壊れた幻想」
フロークンファンタズム

その瞬間、さっきまで俺達が乗っていたバスが大爆発を起こした

永

「なっ!？」

「な?面白いことが起きたろ？」

そういう俺。はっきり言うが俺は異常者だ。人を殺しても何も思わない。以前糞転生者を殺してからずっとそうだ、そこから何かが変わった。いや、変ってしまった

「さて、今の爆発で奴らが寄ってくるだろうから先に行くぞ。」

俺はそういつて王の財宝から一台の車・・・バーサー car を出す

沙耶

「く、車まであるの・・・」

永

「ほんとに何でもありだな・・・てか、この車デザインが怖いな。」
アーチャー

「土・・・なぜこれにした？」

「気分。なんかぶっ飛ばしたくなった。」

麗

「あんだけやってまだスカッとしないの!？」

「いや、できればあの場で紫藤を細切れにしたかったんだけど流石にそりゃ不味いと思って爆破したからなんかね・・・」

孝

「ま、まあそんなことよりも乗ろうぜ。」

そういつて孝がバーサー car に乗り込んだ。因みに最大搭載可能人数は12人なので余裕である

アスム

「なあ、このボタンは？」

「あ、それはまだ押すな。後でいくらでも押せるから。」

アスム

「？」

冴子

「で、運転は誰が？」

「この車は鞠川先生じゃ運転できないから俺がやる。」

鞠川先生

「え！？私だつて運転できるわよ！！！」

「無理ですつて。この車四駆ですよ？」

鞠川先生

「うつ・・・」

沙耶

「あーもう、一々落ち込んでないで座ってください！！！」

沙耶が鞠川先生を座らす。そのとき、何処かからつめき声が聞こえた

「奴らが集まってきたな・・・アスム、そのボタンもう押していいぞ。」

アスム

「あ、ああ。わかった。」

アスムがボタンを押した瞬間、バーサー car の車体前面の口から

巨大な砲弾が打ち出された

沙耶

「・・・なんなの、あれ。」

「何って、砲弾。」

沙耶

「そうじゃなくて、なんであんな大きな砲弾が積んであるのよ!!」

「デフォ?」

沙耶

「私に聞くな!!」

「まあまあ、そういうなって。んじゃ、発進するけど舌嚙むなよ!!」

俺はそういつてアクセルを踏み、一気に最高速度までスピードを上げる。その速度、時速300キロ

麗

「速い速い速い!!!!」

コータ

「土、もうちよつと遅くして!!」

「あー、無理。それと永、そこのボタン押し続けて。」

永

「こ、これか?」

そういつて永がボタンを押した瞬間、バーサーカーの目からレーザーが照射された

「あとはつと・・・」

そして俺はレバーを引き、屋根を出した

「これで落ちることもないだろ。」

沙耶

「わ、私の常識が・・・」

「んなもん今じゃ無用の長物だろ。」

孝

「なあ、弾とかなくならないのか？」

「ああ、大丈夫。弾は無限だから。」

永

「そういえば、今何処に向かつてんだ？」

「あー・・・何処だろう。」

孝

「決めてなかったのか!？」

「まあまあ、こういうときもあるでしょ。こここの近くで家とかが近い人は？」

鞠川先生

「あ、この近くに私の友達の家があるから其処に!! 確か銃とかもあつたはずだから・・・」

「どんな友達じゃ。まあいいか、場所は？」

鞠川先生

「場所は・・・あ、此処此処!!」

「あらま、ちょうど良かったな。」

そういつてその家の前に車を止める。運がいいことに周りには奴らがいなかった

「先生、鍵は？」

鞠川先生

「ええと・・・あつた、これよ。」

「それじゃあちよつと拝借。」

俺はそういつて鞠川先生から鍵を受け取り、ドアを開けた

「よし、全員入室つと・・・」

俺は全員入ったのを確認してからドアを閉め、鍵を全てかけた

「全員いるな？ここからは各自自由行動で、風呂に入る時は一言言つてから入ってくれ。それと男子は男子、女子は女子で一度に全員で入ること。」

麗

「どうして？」

「水の節約のため。少しでも水の消費量を抑えたいからな。」

麗

「わかったわ。それじゃ早速だけどお風呂、使っわ。」

「そのほうがいいな。いつまでも血みどろなのは嫌だろう。」

沙耶

「ほんと。さっさと入って血を流したいわ。」

アーチャー

「だが湯は沸いていないのではないか？」

鞠川先生

「それは大丈夫よ。彼女何時もお風呂沸かしばなしにしてるから。」

麗

「それってお湯交換してないんじゃない・・・」

鞠川先生

「お湯は代えてるって入ってたわよ？」

「なら問題ないな。入っても。」

アスム

「そっういえば俺達はその間何をするんだ？」

「一応ベランダから監視で。俺は其処の頑丈そうな金庫を開ける。」
コータ

「中に何か入ってるの?」

「解析の結果、弾薬多数にボウガンが1つ、ショットガンが1つ、ライフルが2つ入ってた。」

コータ

「早く開けよう!」

「まあまあ焦るなって。というわけで、此処から自由行動な。」

こうして、この世界最初の夜が訪れた

一晩空けて沙耶宅到着（前書き）

2ヶ月も更新が遅れました。覚えてくれてたらいいなあ・・・

一晩空けて沙耶宅到着

「これを開けるのは面倒だな・・・よし、扉を切ろう。」

孝

「なあ士、こんなに頑丈なの開けれるのか？」

「大丈夫だ。この程度の扉、一撃で切り裂いてくれる！！はあっ！！」

俺は王の財宝からデュランダルを取り出して金庫の扉を一撃で切り裂いた

コータ

「これはっ・・・！！」

永

「先生の友達ってどんな人だよ・・・」

アスム

「これ違法だろ違法。」

「知らんがな。てか許可さえ取れば銃だってもてるんだぞ？それに違法といえはこういうのをいうんだ。」

俺はそういつて王の財宝から一発の爆弾を取り出した

孝

「・・・これは？」

「核弾頭。それも原爆の約200倍の威力の奴。」

永

「しまえ！！そして二度と出さな！！」

「はいはい。後はクラスター爆弾とか水素爆弾、N2爆弾、G弾、etc・・・」

永

「頼むから全部しまつてくれ！！それかどこかで爆破処理しろ！！」
「まあそういうなよ。いざとなったら使うんだし、これ。」

孝

「そんな日が来ないことを祈ろう・・・」

孝、その願いは恐らく叶わない。俺がそう思っていると、風呂から
鞠川先生が上がってきた。バスタオル一枚で

永

「ブツ！？なんて格好してるんですか！？」

鞠川先生

「んー？どうしたのー？」

「酔ってるな。」

アーチャー

「ああ、完全に酔ってるな。」

孝

「なあ、なんでそんなに冷静でいられるんだ？」

「いやあ、なんかこう、こんな光景を前にも見た事あるような感じ
がするんだよ。」

アーチャー

「所謂デジャヴというものだ。」

俺がそういった直後、鞠川先生が孝に抱きついた

孝

「ちよつ！？鞠川先生、当たってますって！？」

鞠泡先生

「なんのことかな？」

完全に顔が胸の谷間に埋まってしまった。孝、早々あることじゃないから堪能しとけ

麗

「永」

永

「麗！？おまつ、なんて格好してんだ！？」

麗も上がってきたようだ。バスタオル一枚で

麗

「わあ、永が3人いる」

永

「お前まで酔ってんのかよ！？」

麗

「だって・・・お酒でも飲まないと狂っちゃいそうなんだもん・・・」

「

「永、いきなりこんな状況に巻き込まれたんだ、察してやれ。」

永

「ああ・・・」

麗は永の胸の中で泣いた。仕方の無いことだな

「とりあえず・・・アサシン、外の様子はどうだ？」

アサシン

「外は相変わらず死者どもが溢れておる。」

アサシンの言うとおり、外は奴らで溢れかえっている。所々生存者らしき人影も見えるが助けることは出来ないだろう

「はあ、これじゃあ此処から出るときが大変だな。今のうちに少しでも削るか。」

俺はそういつて奴らに向かって居合い拳を放つ。居合い拳は正確に奴らの頭を捉え、吹き飛ばしている

「確かもう直ぐアリスが出てくるはずだが・・・」

そういつた直後、外から悲鳴が聞こえた

孝

「っ！？士、どうした!？」

「生存者だ!!それもまだ小さい子供だ!!」

コータ

「子供!?どうするの!？」

「どうするって、助けるに決まってるだろ!!」

永

「無茶だ!!外には奴らがうじゃうじゃいる!!」

「大丈夫だ、奴らも・・・空は飛べまい!!」

俺はそういつてベランダから飛び出した

「メタモルフォーゼ!!Zガンダム!!」

瞬時にゼータへと変化し、生存者の下に急ぐ

「その子に・・・手を出すなーーーー!!」

そう叫びながら俺はメガビームランチャーを発射し、奴らを一掃する

???

「誰かー！！助けてー！！」

生存者の声が聞こえ、俺は更に加速する

「大丈夫か！？」

???

「うう・・・私は大丈夫だけど、パパが・・・」

生存者の少女の傍らには、少女を守ったと思われる男が倒れていた

「大丈夫だ、まだ脈はある、今なら助けられるー！！」

???

「ホント！？」

「ああ、ホントだー！！」

俺はそういつて男と少女を抱え込み、空へと飛び上がった

「アーチャーー！！今すぐ車を出してくれー！！」

アーチャー

「わかったー！！」

アーチャーに駐車場の軍用車を出させ、全員を乗せる。俺は生存者の親子を車に下ろすと、周りにいる奴らめがけ

「ビームサーベルにはこういう使い方もあるー！！ビーム・コンフュ
ーズー！！」

ビームサーベルを刃を展開した状態で投げ、その刃にビームライフルを発射した。ビームはそのまま拡散し、周りにいた奴らを焼き殺

した

「あとは・・・リザレクション!!」

俺は変化を解き、生存者の男に回復魔法を使い、傷を回復させると、男の意識が戻った

???

「う・・・ここは・・・」

「大丈夫か？まだ血が足りていないようだ、安静にしている。」
???

「ああ・・・っ!!アリスは!?!アリスは大丈夫なのか!?!」

「ああ、お前と一緒にいた少女も助けた。ほら、此処にいるぞ。」

アリス

「パパ!!」

???

「アリス!!」

感動の再会、まさしくその通りだ

???

「本当にありがとうございます!!どうぞお礼をしたらいいか・・・」

「いやいいんだ。俺たちも好きで助けたわけだし、生存者を見殺しには出来ないさ。」

紫藤は見殺し・・・と言うか自分の手で殺したかな

アリス

「あれ？ジークは？」

「ジーク？」

???

「ああ、ジークは私達の飼い犬なんです。」

「・・・あ。」

俺は思い出した。原作では主人公一行に犬がいたことを・・・

「アーチャー！！先に行ってくれ！！ジークを探してくる！！」
アーチャー

「了解だ！！だが、死ぬなよ！！」

「わかつてる！！メタモルフォーゼ、アリオスガンダム！！」

俺は即座に変化し、変形して先程アリスを助けた場所まで飛んだ

「あそこか！！」

飛び出してから約1分後、俺はジークを発見した。幸いジークは無傷であった

「あらよつと！！」

俺は変形して人型になり、ジークを両手で捕まえた。そして直ぐに転移魔法を使ってアーチャーたちの下に転移させた

「後は・・・こいつらを少し片付けていくか。」

そういつて両腕に装備されているGNビームマシンガンを乱射した。

弾は奴らを次々と焼き殺していく

「ふう……これだけやればもういいか。」

奴らを粗方撃ち殺した俺は、アーチャーたちを追いかけるため、空に飛び上がり、変形してアーチャーの魔力を追った

アーチャー

「で、発見したのがついさっきと？」

「すまん、まさか川を渡つてるとは思わなかった。」

アーチャーたちを見つけた時、時間は既に一日過ぎていた。あの後、奴らに襲われている人を見つけただけ助け、武器も与えてきたために予想外に時間がかかってしまった。まあ、その分だけ原作以上に生存者が残ったが

アーチャー

「まあ、結果オーライと言うものだ。」

「だな、あいつらは？」

アーチャー

「今頃は全員起きているころだと思つが……」

アーチャーが車のほうを見ると、中からぞろぞろと孝たちが出てきた

孝

「土！！大丈夫だったのか!？」

「問題ない、生存者を助けていたら時間がかかった。」

永

「生存者はどうしたんだ？」

「武器を渡した後、街に大きな非難場があることを教えておいた。恐らくは其処にいるだろう。」

沙耶

「で、これからどうするの？」

「その非難場に向かう。生存者がいるところに行けば多少は安心できるだろう。」

麗

「確かにね。特にまだ小さいアリスは安心できるでしょうね。」

「そうなれば善は急げだ。車を車道に上げるぞ。」

そして、俺たちは車を車道に上げ、非難場へと向かった

「そういえば、アリスの父親の名前って聞いてなかったな。」

沙耶

「希里孝治よ。覚えておきなさいよ。」

アスム

「はあ、これからどうなるんだか・・・」

「生きる、生きるしかないさ。例え生存者が俺たちだけになっても。」

「

まあ、その前に俺は元の世界に戻る可能性もあるがな

孝

「そういえば、永と麗は？」

「屋根の上にいるぞ。上から銃で攻撃するようだ。」

沙耶

「そんな無茶な・・・落ちたら奴らの餌食よ？」

「まあ大丈夫だろ。滅多なことじゃ落ちないって。」

そういいながら走っていると、運転していたアーチャーが何かを見た

アーチャー

「むっ？あれは・・・」

「アーチャー、何か見えたのか？」

アーチャー

「ああ、何か細い・・・っ！？永、麗！！今すぐ中に戻れ！！」

アーチャーがそういった直後、車全体に強い衝撃が走った

「ぐう！！ワイヤーか！？」

コータ

「見ちゃダメだ！！」

アーチャー

「くっ、血油でタイヤがロックしているのか！！」

「なら外から衝撃を与えて無理やり動かすまで！！麗、永、まだ戻れないのか！？」

永

「あと少し・・・よし！！開いた！！」

「二人とも入ってきたな！！一発かますぞ！！デйм・ウィン！！」

その瞬間、車体が一瞬浮き、数メートル後ろに跳んだ。此処まではよかったが・・・

「うおっ!?!」

麗

「きゃあ!?!」

アスム

「ぎゃふん!?!」

車が横転してしまった。これでは元の体制に戻すまで車はつかえない

「横転したか・・・全員!!自分の武器を持って外に出ろ!?!」

俺はそう叫び、アリスと孝治さんを車から出した

「大丈夫か!?!」

孝治

「あ、ああ。大丈夫だ。」

「ならここで待っていてくれ。全て遠き理想郷アウアロン!?!」

二人をアウアロンで覆い、俺は奴らに向けて攻撃を開始した

「バオウ・クローウ・デイスグルグ!?!」

右手を上に掲げ、そう叫ぶと、空に巨大な龍の手が現れる。そして、俺の右手の動きに合わせて龍の手は奴らを切り裂いていった

「次行くぜえ!!ファルセーゼ・バーロン!?!」

空に星型の物体が現れ、それら全てが奴らに光線を撃っていく

「孝!?!そっちは大丈夫か!?!」

孝

「ああ！！こっちは大丈夫だ！！」

アスム

「みんな！！でかいの出すから下がってくれ！！」

アスムがそういうと、全員が俺の後ろまで下がった

アスム

「出でよ青き究極龍！！ブルーアイズ・アルティメットドラゴン！！」

アスムがそう叫ぶと、空から三つ首の巨大な龍が降りてきた

沙耶

「龍！？なんで空想の産物が！？」

「俺という空想の産物が存在してる時点で龍の一匹や二匹ぐらいいたって不思議じゃないだろ。」

沙耶

「魔法使いなんてものよりも龍がいるほうがよっぽどありえないわよ！！」

「・・・ひでえ。」

俺がそういった直後、アスムから驚愕の言葉が出た

アスム

「ブルーアイズ！！この周辺を吹き飛ばす勢いで攻撃だ！！」

麗

「はあ！？やめなさい！！生存者まで吹き飛ばす羽目になるわよ！！」

アスム

「ならどうしろと！？」

「アスム、俺が結界を張る。その後全力で攻撃させる。」
アスム

「わかった!!」

「スネーク、この街全体に封鎖結界を。」
スネーク

《わかった。やつらは捕捉出来るだけ捕捉する》

「頼んだぞ。」

次の瞬間、街から人の気配が消えた

「アスム!!!いいぞ!!!」

アスム

「おう!!!ブルーアイズ・アルティメットドラゴンの攻撃!!!アルティメット・バースト!!!」

その瞬間、ブルーアイズの口から青白い光線が吐き出され、街を焼き払った

永

「うおっ!?!」

麗

「きゃあ!?!」

凄まじい爆風が吹き荒れ、視界がゼロになる。そして、視界が晴れた先には

「わーお、流石はアルティメット。生けるロストロギアにでもしてしまおうか。」

何も無かった。建物も、奴らも、全て消えていた

孝

「なっ・・・!?!」

沙耶

「何にも無い・・・皆吹っ飛んだの!?!」

冴子

「なんという威力だ・・・」

アスム

「ブルーアイズ、戻っていいぞ。」

アスムがそう言うと、ブルーアイズは元のカードに戻った

アスム

「土、もう結界を解いてもいいぞ。」

「ああ、そうさせてもらう。」

俺は結界を解除した。瞬間、壊されたはずの建物は全て何も無かったかのように戻った

「孝治さん、もう大丈夫だ。」

孝治

「あ、ああ。しかし、さっきのは?」

「その説明は後です。まずは非難場に行くことが先だ。それに、もう迎えも来てるしな。」

俺がそういつて後ろを指すと、防護スーツを着込んだ人達が数人、こちらに来た

?????

「よく頑張ったわね、沙耶。」

沙耶

「ママ!!」

数人の中の一人がマスクをはずす。どうやら沙耶の母親だったようだ

「孝治さん、立てるか?」

孝治

「ああ、大丈夫だ。アリス、こっちに来なさい。」

アリス

「はい。」

「ほら、お前たちも行くぞ。」

こうして、俺たちは無事、非難場である沙耶の家に到着したのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4650n/>

学園黙示録 二人の英霊と一人の転生者

2010年12月7日22時53分発行